
Freedom Kingdom

鳥風羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F r e e d o m K i n g d o m

【Nコード】

N 5 1 1 1 Z

【作者名】

鳥風羅

【あらすじ】

高校生の橋本知恵はある日、魔法陣にとらわれて楽園のような世界に落ちる。働かなくてもいいし、学校に行かなくてもいい夢のような場所。そこで行われている娯楽の一つ、『バーチャルリアリティゲーム』に参加することになった。そのゲームの内容とは――
！？

序章

なんでも願いが叶うとしたら、キミは何を願う？

「何これ？」

知恵は信じられないものを見るかのように一歩後ずさった。クマのキーホルダーのついた鞆を持って足元を見る。

薄暗い教室の中で一人、知恵はなくなつた財布を捜していた。そこに突然ソレは現れたのだ。

震える足で少しずつ後ろに下がる。知恵の視界に全体像が浮かび上がった。

鈍く輝く大きな円。

その中には何重にも絡みあつた複雑な図形。

実物で見たのは初めてだ。

ありえない。こんなものが現実にあるなんて。

でも、これは――

「魔法陣・・・」

恐る恐る呟く。

知恵はオカルトなんて信じない。むしろ苦手な部類に入る。だが、目の前にある魔法陣がその存在を証明していた。

何か出てきたらどうするんだよつ。

鞆を胸にぎゅうつと抱き締めていると、ふいに光が弱まり何事もなかったように消えていった。

奇妙な沈黙が訪れる。知恵はその場にへたり込んだ。乱れた息を整えようと大きく息を吐き出す。錯覚だと自分に言い聞かせる。見間違えたんだ。疲れてて幻覚を見たんだ。そこに冷やりとした手が首筋に伸びてきた。思わず奇声を上げる。

「ご、ごめんなさい橋本さん。大丈夫？」

心配そうな声が降ってきた。聞き覚えのある声に顔を上げると担任の先生が引きつった笑みを浮かべている。

この先生はいつもそうだ。知恵と話するとき下手な作り笑いをして場をごまかす。どうやら知恵のことが相当苦手らしい。先生だけに限らないが。

知恵は知った人が現れたことに少しほっとし、混乱した頭を落ち着かせた。

「大丈夫です。すみません、変な声だして・・・あ」

先生の右手を見る。そこには知恵の捜していた財布があった。先生は知恵の視線に気づき財布を差し出す。

「これあなたのね？トイレのゴミ箱に落ちてたのよ」

「・・・そうですか。ありがとうございます」

捜しても見つからないわけだ。さすがにトイレのゴミ箱は捜していなかった。

素直に受け取り礼を言う。すると先生は苦笑しながら「早く帰るのよ」と言っただけで逃げるように去っていった。

一人きりになった知恵は財布の中身を確認した。トイレのゴミ箱に落ちていたなんて明らかにいじめだとわかるのに、先生に何も言われなかったことがなんとなく虚しい。

中身は案の定空っぽだった。

もともと小銭しか入っていなかったのだが盗まれたことに変わりはない。しかし知恵はとくに気に留めず、財布を鞆にしまおうとした。その手をふと止める。トイレのしかもゴミ箱に落ちていた財布を鞆に入れるべきか迷ったのだ。これは、捨てるべきなんだろうか。

考えあぐねていると、足元で何かが光るのが見えた。

知恵が肩をビクリと震わせると同時に鈍く光る円が再び広がる。逃げようとしたが足が動かない。

「何でっ!？」

恐怖で動かないんじゃない。床に足がくっついたように動けないのだ。背中に何かが這い上がってくるような嫌な焦りを感じつつも何もすることができない。

知恵を中心とした魔法陣は一気に輝きを増し、動くこともできずに眩しさに目を瞑った。

魔法陣は知恵を飲み込み、そのまま消えていった。

一話 よついで Freedom Kingdomへ

石畳の道を歩く。

周囲には出店が並んでいた。パン屋やケーキ屋、服屋や雑貨屋、そのほとんどが手作りだ。むしろ全てが、といったほうが正確かもしれない。工場で多量生産するような全く同じような物は売っておらず、形も色も味も素材も、似ているものはあっても少しずつ違っている。全く同じものがたくさん並んでいるのは気持ち悪いという考えは、少なからず理解しているつもりだ。

歩いているだけで多くの人とすれ違った。そしてみんながみんな笑っている。楽しそうに嬉しそうに笑っているのだ。悲しい人なんていない。寂しがっている人もいない。苦しんでいる人も泣いている人も怒っている人もいなかった。ここはそういう所だから。

家と店が隣接している喫茶店があった。隣接しているのは珍しいことではないが、この喫茶店は特に大きな店だった。客が絶えず来るような有名な店。しかし、今日は扉が閉まっており『closed』と書かれた可愛い看板が吊るされている。

構わず中に入る。薄暗い場所だった。あまり明るくない方が落ち着くだろ、と言っていた男を思い出す。

それほど広くない室内には木製の椅子やテーブルがいくつも並んでいる。部屋の隅には全体を見渡せるようになったカウンターも設置されていた。もちろん、客は誰もいない。

「セーガアア！！待ってたよ、遅い、遅すぎっ」

客はいなかったが、幼女がいた。二つに縛った金色の髪がパサパサ揺れる。黒いゴシック調のワンピースに金髪がよく映える。

「もう新しいマスターが来たよ。カノン嬉しくて抱きついちゃった」
無邪気に笑いながら、セーガの袖を引っ張り奥へ連れて行くところ。

「でもね」

十歳くらいの少女は目を伏せていかにも寂しそうに言った。

「知恵姉はマスターやりたくないんだって。帰りたいって」

知恵というのが新しいマスターの名前らしい。

「カノン、心配しなくていい」

頭をなでるとカノンはすぐに笑顔を取り戻した。セーガはカウンターの隣にある扉を開ける。カノンが奥へ走っていった。

棚やショーケースに商品がずらりと置かれているこの部屋も喫茶店の一部だ。日用品や電化製品と何から何までそろっている。どちらかというと喫茶店が副業に近いのだが、それを認めない人が多数いるので黙っておく。

奥へと進むが、カノンが消えた方から騒がしい声が絶えない。大体予想はつく。マスターを呼び出すのもう何回もやっている。

「意味のわからないこと言わないでください！元の場所に返して！」

棚の陰から覗くと、セーラー服を着て鞆を持った少女が三人に囲まれていた。

天然なのか寝癖なのか、おろした髪が肩ではねている。

「困ったな。本当なんだって。ここスツゴク楽しい場所なんだよ」
「信じて、知恵姉。僕と一緒にここにいよ？」

「カノンも一緒だよ！いっぱい遊ぼうよ」

カノンが飛びつくのをマスターは慌てて抱きとめる。三人とも参った様子だった。

「マスター」

呼びかけてみるとすぐに反応した。鋭い目でじっと睨んでくる。

「私はマスターじゃない。承諾した覚えはないです」

はつきりとした物言いに苦笑する。パーカーのフードを深く被った男がセーガに近寄ってきた。

「オレたちが何言っても信用してくれないんだよ。セーガなんとかして」

「湊がゴウモンなんかするから」
みなと

投げやりな態度の男にカノンそっくりの金髪少年が嫌みたらしく言う。セレナとカノンは双子の兄弟だ。セレナもすっかりとしたスーツのようなゴシック調の服を着ている。小さなバーテンダーのようだ。

聞きなれない言葉にカノンが疑問符を浮かべた。

「セレナ、ゴウモンてなに？」

ちよっと考える仕草をしてからセレナはにっこり笑う。

「カノンは知らなくていいんだよ」

「絶対拷問の意味わかってないだろ」

マスターが眉をひそめているのもお構い無しに騒ぐので、セーガは手を伸ばした。カノンとセレナの頭をぽんぽん叩く。

「そこまでだ。二人は魔女の様子を見てきてくれないか」

「はい。部屋にいるかな」

「魔女さんにクッキーもらおうよ」

ニコニコと走り出す二人を見送る。湊は呆れたようにため息をついた。

マスターに向き直る。

「早く帰してください」

目が合ったと同時に言われた。今までのマスターとは違うタイプだなと思う。

「悪いが、それは無理だな」

「どうしてですか。私が納得する理由を言ってください」

湊たちはどこまで話したのだろうか。マスターは相当嫌がっているように見える。

「『楽園』とか非現実的なことと言って誤魔化さないでくださいね」

マスターから『楽園』という言葉が飛び出したことに驚く。楽園か。湊がそう説明したのだらう。

隣を見ると湊が口角を上げて笑っている。

「現実かどうかはあんたが判断してくれ。俺は事実を言うだけだ」

「私が納得しないと意味ないですけどね」

「そうだな」

マスターは目を逸らさない。三人が言いくるめられなかったのも分かる気がした。

「ここはあんたのいた世界とは違う。簡単に言えば非現実的な樂園だ」

「へー、ありえないですね」

「魔法陣を見ただろう」

マスターは一瞬肩を震わせて、持っていた鞆をぎゅっと抱いた。意外と不安に感じているのかもしれない。知らない所に一人で投げ出されたのだから。

「ここには何でもあるし、何でもできる。学校にも行かなくていいし、働かなくても生きていける」

そこでセーガは期待していた顔を見ることができず、少し驚く。少女は少しも反応しなかった。今まで来たマスターはほとんどがこの話をするだけで羨ましそうな表情を見せる。この少女は混乱しなければ興味も示さない。面白いと思った。

「ここにいれば自由だ。遊んで暮らせる」

「夢の国ってわけだ。オレも初めて来たときはすっげー意味不だったけどな」

「ここの人じゃないんですか」

訝しげに湊を見る。やっと食いついてきた。

「そ。オレもここの住民じゃないわけ。知恵ちゃんとは違う方法で来たんだけどさ」

「日本人ですか？」

湊はにっこり笑う。

「どうだろう。エイリアンかもしれないよ」

「湊。あまりからかうな。話が進まない」

軽く頭を小突く。

「ほんとだよ。あんたは話し下手なんだから黙ってな」

いつのまにか後ろに杖をついた老婆が立っていた。そのあとにセレナとカノンもいる。

「魔女。大丈夫なのか」

「忙しくて敵わんわ。店を開けるからとっと出てっておくれ」

しっしつと手を振る。セレナとカノンはマスターにクッキーを渡していた。

「今日は喫茶店あとでやればいいって」

「知恵姉と外に行ってこいって」

魔女がマスターに近づく。すいすい歩いてあっという間に目の前に立つ。まだまだ丈夫だ。

「あんたが新しいマスターかい？」

「違います」

きつぱりと言い切る。魔女はケタケタと高い声で笑った。

「いうね。いいよ、そのくらいがいい。正直者じゃなきゃやっていけんよ。みんなそれで辞めていったんだ」

魔女はしわの寄った手でマスターの肩をパシパシ叩く。

「いいかい？あんたは嫌がってるようだが、外の様子も見といて。気になることがあるかもしれんよ」

「私、早く帰らないと親が心配します」

「大丈夫。時間は気にせんでええ。魔女が止めてやるけんの」

マスターは目を見開いたが、すぐ考え直したようで仕方なく頷いた。魔法陣やら楽園やらでこの世界に常識が通じないことを理解したんだろう。今度のマスターは理解力もあるようで助かった。

「帰る方法はあるんですか」

「探しとくよ。あんたが帰ってくるまでにね」

魔女の言葉を信じたかどうかは分からないがマスターが礼を言う。すると、魔女はさっさと全員を追い出し、店を開けた。扉に掛かっている看板も『open』になった。

「セーガ、最後のマスターだ。しっかりやっておくれ」

去り際に魔女が囁いた。当たり前だ。最後のチャンスを逃すわけに

いけない。

「強引だよなあ、魔女さんは」

湊の呟きを無視し、マスターに案内するのが楽しみなんだろう、カノンとセレナはぴよぴよと歩き出した。

マスターは青く澄み渡った空を見上げている。そして、町に目を移す。

セーガはいつもの言葉を台本を流し読みするかのように言った。

「マスター、ようこそFreedom Kingdomへ」

二話 マスター

どうしてこうなったのか自分でもよくわからない。

とにかく、帰る方法を見つけようと思った。魔女って呼ばれてる人も、今一緒にいる人たちも信用できるかわからない。知らない世界に来てしまったのなら自分で自分の身を守るしかない。

知恵は辺りを見渡した。

放課後の学校にいたのには今は雲ひとつない青空の下にいる。夕方だったのに昼間なのだ。携帯の時計も役に立たないし、圏外でどこにも連絡がとれない。やはり、自分で考えるしかないのだ。

この世界は一言でいえば、ヨーロッパのどこかの国だ。家から家へと洗濯物が渡って干してあったり石造りの建物が並んでいて、外国の街を歩いているような錯覚に陥る。実際に外国人のような人もたくさんいる。言葉は通じるみたいだが。

「知恵ちゃん、どう？結構楽しいでしょ」

両手に紙袋を持ったフード男が知恵に話しかける。重そうな紙袋は双子に持たされていた。当人たちはパン屋の試食をしに行っている。セーガという人はさっきから何人もの人に声をかけられて、今は少し遠くで話中だ。

「楽しいというか、すごいですね。お金じゃなくて物々交換で買い物するなんて」

この世界にお金というものは存在しないみたいだ。てっきりこの世界専用のお金があるのかと思っていたが、あるお店でクマのぬいぐるみを買おうとしたところ、お金ではなくボールペンをとられた。お金が必要だったらこのフード男に買わせるつもりだったが、まあ、

クマのぬいぐるみをただのボールペンで貰えるなら安いもんだと思
い買ってきた。ケーキも食べたし、我ながら満喫してしまっている。
そろそろ帰るための対策を練らなきゃ。

「あの、湊さん。質問があるんですけど」

真面目に言っと、フード男、確か湊と呼ばれていた人がぷつと吹き
出した。間違えた？湊じゃなかったっけ。

「ははっ湊さんだつて、あはははっ」

腹を抱えて笑っている。そんなに笑わなくてもいいのに、失礼な。

「ごめ、はははっいいよ、呼び捨てで。むしろそうして、じゃなき
やオレがもたな、あはははっ」

しゃがみこんで笑い出した。なんだこの人。
そこに話を終えたらしいセーガがやって来た。腹を押さえて苦しそ
うに笑っている湊を一瞥すると、知恵に謝ってきた。

「悪いな、迷惑かけた」

ここに来させられた時点で大迷惑です。とはとても言えない。

「いえ、それより質問が」

「敬語は使わないほうがいい」

「え？」

湊が置いた紙袋を持ちながらセーガが呟く。

「敬語を使うとまた湊に笑われる。他の奴等もあまり敬語は好かないらしい」

敬語がだめってどんなとこだよと反抗したくなるが、ここは素直に了承する。また笑われるのはなんか嫌だ。

「じゃ、質問。私は何でこの世界に来たの？マスターって何？」

何だかんだで聞いていなかったこと。帰るためのヒントになる可能性は十分にある。

「ランダムだ」

「は？」

思わず聞き返してしまった。ランダムって何？

「ランダムでマスターは選ばれるんだ。あんたは偶然選ばれてここに来た」

「偶然でこんな目にあうんじゃ大変だね」

「知恵ちゃん楽しんでるじゃん」

湊が見下ろしてくる。いつのまに復活したんだ。鞆についているクマのキーホルダーをいじっていた。

「クマ、好きなんだね」

「別に」

そっけなく答えると二人は顔を見合わせた。クマのキーホルダーが鞆についているからって、クマのぬいぐるみを買ったからって、別にクマが好きなのじゃない。ちよっとの行動で好き嫌いを決め付

けるのはやめてほしい。だから人は嫌なんだ。

「悪い。ここに来た理由だよな？」

セーガが手を前に出す。そのまま横にスライドさせた。すると、手のひらサイズの四角くて薄いパネルのようなものがでてきた。

「……え？」

一瞬のことでもよくわからなかった。パネルはテレビのように何かを映し出している。何で画面が出てきたんだ？ しかも浮いてる。

「これはあんたの世界で言う……」

「パソコン。セーガいい加減覚えて」

「……パソコンらしい。いわゆる情報源だ」

情報源。正直すごいと思った。手を少し動かすだけでインターネットに繋がるのか。それは指でタッチして使いたい。いつか地球でもこうなるかもしれない。いや、何もないところからパソコンは出せないか。さすが楽園。

「あんたもやってみろ。手を横に動かすだけだ」

私にもできるのかと驚く。言われたとおりに空気の上でスライドさせる。手と空気が擦れるような少しくすぐったい感じがした。パネルが浮き上がる。

「おお。すごい。ハイテクね」

「だろ？ここじゃみんなよく使う。たとえば、」

湊がパネルの右上にある動画に触る。すると画面いっぱい大きく
なって動画が流れ始めた。なにやら武器を持った人が動いている。
剣や銃だ。手から光を放った人もいる。CGを使った魔法を使うド
ラマかと思ったが合成には見えない。

「何これ？」

湊に尋ねてみると人差し指を立て怪しげな笑みを浮かべる。

「ゲームだよ」

「・・・ゲーム？」

「そう、武器を持って戦うやつ。魔物はいないけど」

「でもこれ、本物の人だよね？」

「もちろん」

啞然とする。本物の人がそんなことしたら大怪我するじゃないか。
そもそも魔法がでる時点でおかしい。

「このゲームはダムダムの娛樂の一つなんだ」

「ダムダムって何？」

「Freedom Kingdomの略」

「センスわるっ」

この世界はFreedom Kingdomという場所らしい。この
名前からして変だとは思うが、ダムダムって微妙……。この世
界の人たちはネーミングセンスないのかな。

「いいと思っただけだなあ、ダムダム」

湊は肩を下げてしょぼくれた様子だった。フードの下から綺麗な白

い髪が覗いている。不思議に思いよく見ると銀の髪だった。染めているのだろうか。

「俺たちはこのゲームに参加しているんだが、あんたにはこのチームのマスターになってもらおうと思ったんだ」

「ゲームのマスターだったんだ」

「そうだ。ルールは簡単だからあんたにもすぐできる」

そういわれてもと思い、もう一度パネルを見る。剣を持った男の人が女の人に切りかかっていた。人間同士で戦うようだ。戦争のように見えなくても、娯楽としてのゲームなのだからそこまで危なくはないのだろう。切られた人も血は出てないし、痛くもなさそうだ。あくまでここは楽園。なんでもありなんだろう。

「でもマスターってそのチームを仕切る人なんじゃないの？そんなの素人に頼んでどうすんの」

「マスターはこの世界の住人以外の人と決まっている。俺たちには無理だ」

「湊は違うんじゃないの？」

「オレ？オレは住民じゃないけど住人だから」

「意味同じなんだけど」

え、と言って目を丸くする湊。次の瞬間には笑い転げていた。

「うっそ、やべ間違えた。オレウケるわ」

勝手にウケないでください。笑ってまともに話せなくなった湊に代わりセーガが説明してくれた。

「湊はここに住んでるからマスターにはなれないんだ」

「なるほど、ということはここに住んでない人もこの世界にはいるの？」

「いるが、それはマスターだけだな。マスターは特別なんだ」
「へえ」

ここに来た理由はよくわかった。こんなくだらないゲームに付き合うためにだけ来たということだ。

しかも、この人たちは嘘をついている。

話を聞いてわかった。なぜ嘘をついているのか、今この場で聞いただしてもいいがもう少し待ってみようと思った。ほんの気まぐれだ。

「やってみる気はないか？」

「ない」

即答してやる。少し悲しそうな表情をしたが、そんなことは気にしない。

「マスターをわざわざ呼んでまでやるゲームなんか、やんない方がいいんじゃない？ そんなに楽しいゲームなの？ よくわかんないけど諦めたほうがいいよ」

パネルの仕舞い方がわからず、まだ目の前に浮いていた。セーガはそのパネルに手を伸ばし、操作し始めた。湊が笑って見ている。

「これだ」

差し出されたパネルを見ると、このゲームの賞品について書かれていた。短い説明文を読む。セーガの言おうとしていることにすぐ気

づいた。だが信じられない。いくら樂園といえどもこれはさすがにあり得ないと思った。

「・・・こんなの信じてるわけ？」

「ああ」

殴りたい衝動に駆られる。馬鹿だ。こいつらは単なる馬鹿なのかもしれない。

「普通に考えて騙されてると思わないの！？こんな『神に会える』なんて！」

笑い飛ばしたくなる文章だ。神に会って願いを叶えてもらう？おかしいにもほどがある。知恵からしてみると神に頼んで夢を叶えてもらおうなんて最低最悪だと思う。自分で努力もしないのか。努力しても叶わないから神に頼むのか。そんなこと死んでから言え。死ぬまで頑張ってこそ努力したと言えるんだ。

「知恵ちゃん、落ち着いて」

「うるさいっ、ほんと最低なクズね。絶対マスターなんてやらないから！」

走り出そうとする知恵の腕をセーガが掴む。セーガが湊に何か目で合図をする。知恵は腕を振りほどこうとするがセーガが掴んだ手を離さない。

湊が誰かと話すと、頭の中に声が響いた。

《バーチャルリアリティーゲーム承認。カウントダウン開始します》

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5111z/>

Freedom Kingdom

2011年12月19日19時54分発行